

## ドリュ・ラ・ロシエルとその20年代

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者: 明治大学教養論集刊行会<br>公開日: 2012-05-16<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 山路, 昭<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/10291/12109">http://hdl.handle.net/10291/12109</a>                                  |

# ドリュ・ラ・ロシェルとその20年代

山路 昭

## (I)

Drieu La Rochelle は、晩年の日記のなかで書いている。《1924年と1925年は、ぼくの人生の最初の転換期だった。自伝を書くとするれば、どうしてもその時期について詳しく語らねばなるまい》と。Drieu は1893年に生まれている。彼らは戦争によって生の真実を最初に体験した世代であり、そして戦後の退廃と虚無のなかでその文学的な出発をおこなった戦後世代でもあった。1925年には、すでに彼は三十歳を越えていたのであり、最初の詩集 *Interrogation* (1917) を Gallimard 社から出版して以来、すでに10年近い年月が過ぎ去っている。その間、第二詩集、*Fond de cantine* (1920)、幼少年期の自伝的回想 *Etat civil* (1921)、文明批評 *Mesure de la France* (1922) などが発表されている。しかし、20年代の Drieu の作品を特徴づけている虚無と退廃を生きる人間像が、明確に作者の主体性をともなって描きだされるのは、最初の短篇集、*Plainte contre inconnu* (1924) であり、さらには長篇小説、*L'Homme couvert de femmes* (1925) においてなのである。Drieu が、あらゆる既成の価値が問いなおされているような混迷の時期にあって、自己の文学の主体性を確立し、独自の道を歩みはじめるためには、かなり長い試行錯誤の期間が必要だったのであり、その期間とはダダからシュルレアリズムへと向う混乱と激動の時代でも

あり、彼はほとんどシュルレアリストたちの周辺にあって、行動をともにしていたのだった。

Jacques Baron は、そうした時代の Drieu の肖像を次のように書いている。

《青年ドリュは戦争に参加したのであり、その頃の彼は恋愛をしていた。自分以外のなにものかに向うという、それは同じ行動だった。彼は、同時に、青春と美のきらめくような祖国にたいする郷愁をいただいていたのだ。彼はみずからがそう願っていたように、フランス、ヨーロッパを指定したのだ。それは、永遠なるものによって、それ自体が変革されることであった。ある種のまったく新しい中世である。彼は社会学と恋愛小説を混同し、性の問題から経済へと突如として移ったりすると批判されてきた。それが彼の誠実さであり、誠実であるということはしばしば、混乱をまねくのである……。

魂のうちに死をいただいているような人々がそうであるように、彼は生を愛していた。現代の激動、心臓の鼓動、機知の巧みな表現、詩の神秘的な伝統などである。彼はアラゴンとともにそうしたものに通暁していたし、シュルレアリストの好奇心のある一部を分ちあってもいた。友情とは好奇心を分ちあうことなのである。ブルトンは、ドリュが注目すべきやり方でフランス語をあやつっていると見ていた。しかし、二人はおたがいに或る距離をおいていた。ブルトンは体験的な生きかたを軽蔑してはいなかったが、先入観からかあるいはまったく別の理由からか、自分の僧院を離れようとはしなかった。ドリュは彼の僧院をほとんどたまにしか訪ねることはなかった。アラゴンは両者のあいだを鋭い機知と誠実さをもって往来して<sup>(1)</sup>いた。》

ここには、20年代前半の Drieu の置かれていた状況がみごとに描きだされている。戦争のめくるめくような体験と戦後のデカダンスにおける女。そして過ぎ去りつつある青春の追憶。退廃と絶望のなかからの人間と社会の復興。死と愛。これらは、いずれも Drieu の文学の、そして生そのものの主題なのであり、そして、シュルレアリストたちの、とくに Aragon との友情のなかから、Drieu 自身が Aragon はシュルレアリストとの《自然のかつ人間的な絆》であったと語っているように、彼の精神の形成と展開がうみだされたのであった。

Drieu がはじめてこの四歳下の友に出会ったのは、1916年のことであり、彼の最初の妻、Colette Jeramec を通してであった。彼女は同じ医学部の学生だったのである。それ以来、Drieu は Aragon にたいし高い評価の念を抱きつづけてきたのであり、*L'Homme couvert de femmes* は Aragon に捧げられている。後年になって Drieu は、*Gilles* において、Aragon は *Aurélien* においてそれぞれ若き日の友人の像を描くことになるのだが、*Gilles* においては、Drieu は Breton や Aragon にたいして、否定的な立場をとり、Aragon は青春への追憶をこめながら、ひとつの時代の典型の創造に成功していることは興味深い。Drieu にとってこそ、シュルレアリストとは、乗り越えなければならない存在だったからである。そして冒頭に書いたように、1925年は、Drieu とシュルレアリストとりわけ Aragon との最初の決裂の時でもあった。

Marcel Arland はそのドリュ論のはじめにおいて、《人物と生涯と行動が、彼の場合ほど渾然と一体になっている例はない<sup>(2)</sup>》と書いているように、たしかに、Drieu はその生涯を賭して、いくつかの試行錯誤を重ねながらも、自己の生の願望を貫きとおそうとしたのであり、そして、そのことのために書いたのであった。戦後の虚無と絶望のなかで、女と酒に溺れながら孤独な無為の嘆きを繰り返している Drieu と、そうした絶望のなかから、ヨーロッパとフランス、そして人間と文明の復興を願いつづけている Drieu、こうした Drieu の生と文学は、個と全体、個人と社会、生と文明のさまざまな分裂を深く意識のなかに含みながらも、なおかつそれらの統一を求めようとする、一貫した願望によって支えられていたはずであった。シュルレアリズムが、生の全体的な統一の回復を究極においてめざしたものであるとすれば、Drieu が1920年代において、彼独自の立場において、シュルレアリストたちに深く影響されながらも、自己の文学の主體的確立をめざしたことは、当然のことなのであった。この小論においては、そうした観点から、Drieu とシュルレアリスムの関係を検討しながら、同時に、Drieu 文学の主題の展開について考察してみることにする。

Drieu は、直接、シュルレアリストに宛てた手紙を三回にわたって発表して

いるのであるが、その最初の手紙は、*La véritable erreur des surréalistes* と題され、1925年8月の *N. R. F.* 誌に発表されたものであり、この手紙を契機として、Drieu とシュルレアリストのあいだの離反は決定的なものとなる。そして後の二つの手紙は、やや間隔をおいて、1927年2月と7月に、Drieu が Emmanuel Berl とともに創刊した彼の個人雑誌 *Les Derniers jours* に発表されたものであった。この第一の手紙と後の二つの手紙を比較してみると、前者がかなり唐突に、感情的と思われるほどに、激烈な口調でシュルレアリストを批判しているのに対し、後者は、自己とシュルレアリストとの関係を、自己の文学の主題の展開と関連させながら、冷静に反省し、分析し、そのことなかから自己の進路を決定しようとする Drieu の苦悩がうかがえるのである。この第一の手紙が発表されることになった直接の動機は、シュルレアリストの Claudel に対する公開状なのであり、それが参会者各人に手渡された *Les Nouvelles littéraires* 誌主催のサン＝ポール・ルーの祝賀会の出来事であった。

(3)

Maurice Nadeau らの記述にしたがうならば、この会合は、7月2日、モンパルナスのクロズリ・デ・リラで行われ、シュルレアリストの多くが参加していた。シュルレアリストたちの公開状は、Claudel がある雑誌 (*Comœdia*) の質問に答えて、シュルレアリストの文学活動は、真の意味での創造をもたらすものではなく、《男色的な意味しかもたない》と批判したのに対し答えたものであった。Drieu はそのなかから次のような文章を引用している。《……われわれは全力をあげて、革命、戦争、植民地の反乱などが、この西歐文明をやがて根絶することを望んでいる。あなたは東洋までこの文明の害虫を防ぎに行くが、われわれはこの文明の破壊を精神にとってもっとも受け入れやすい事態として呼び求めているのである。》……《われわれにとっては、調和も偉大な芸術も存在しないであろう。すでにはるか以前から美の理念は硬直しているのだ。》……《われわれは、言葉においてであれ、行動においてであれ、フランス的であるすべてのものから、公然と離別するためにこの機会をとらえる。》……《われわれにとって救いはどこにも存在しない……》。こうした Claudel への批判とともに、この集会は、やがてひとりの女性の《フランスの女性はドイツの男

と結婚することはできない》という発言をめぐって、Breton が友人の Max Ernst を顧慮し、反対意見を述べ、大混乱におちいったのであった。シュルレアリストたちは、保守的なナショナリズムに反対し、植民地戦争に抗議し、《ドイツ万歳、リフ族万歳》を絶叫し、またある者は戸外の群衆に向かって《フランスくたばれ》と叫んで大きなスキャンダルを惹起したのであった。その結果、*L'Action française* をはじめとする保守的な文学者、知識人たちはシュルレアリストにこぞって反対し、シュルレアリストを文壇からしめだし、沈黙させるよう抗議したのだった。

Pierre Daix によれば、この事件は、シュルレアリストと伝統的な、旧来の知識人との《<sup>(4)</sup>決定的な決裂》であり、前年の Anatole France の死にあたって、彼らが発行した侮蔑的なパンフレット、*Un cadavre* にはじまる彼らの既成秩序に対する攻撃の当然の帰結であった。シュルレアリストの運動は、1924年には Breton の *Manifeste du surréalisme* が発表され、同年11月には、*La Révolution surréaliste* 誌が創刊され、その内部には多様な意見の対立を含みながらも、ひとつ頂点に到達していたのだった。シュルレアリストたちは、あたかもこの事件を契機とでもするかのようになり、リフ族の反乱に対する弾圧——モロッコ戦争——への反対闘争を直接の目的としながら、*Clarté* その他のグループとの連帯行動を強化し、 Kommunismus へ接近することになる。そしてこのことは、シュルレアリストにとって革命を文学と芸術における反抗から、社会的、経済的な政治の領域における実践にまで拡大した、重大な転機を意味していたのだった。

*La Révolution surréaliste* 誌が発刊された時点においては、彼らは革命を思想、芸術の領域において指向していたことは確かなのであり、たとえば、Aragon は、*Clarté* 誌の主筆 Jean Bernier の批判にたいし、<sup>(5)</sup> 次のように答えている。《君は、私がボルシェヴィキの政府やその政府とともに Kommunismus 全体についてほとんど好意をもてないということを証明した一文を狂気の沙汰だと指摘した。……君が、私を政治の精神を認めず、さらにあの不名誉な実践的な態度に激しく敵対している人間だと考えているとすれば……それは私が

反抗の精神をつねにあらゆる政治を越えたところにおいでいるからだ<sup>(6)</sup>》

そして、Pierre Daix によれば、《もうこれが最後のものだと言われていた戦争が終って七年もたちながら、自分の祖国が遠く離れた国へ戦争をもたらし、その息子たちを殺人者にしたてあげるようなことは、私にとっては許しがたいことだった、そして、私はあの戦争に反対していた唯一の党へまっすぐに走ったのである<sup>(7)</sup>》と語っているように、Aragon は1925年の7月には、Clarté 誌のアンケートに答え、彼はモロッコ戦争への断固とした反対の立場と政治への参加の決意を表明しているのである。

Drieu のシュルレアリストに対する批判はこうした、事態の急転回のもとで発表されたものであり、とりわけ Aragon の変化にたいして、彼がそれを理解しがたい突然の行動と受けとっている困惑の感情が明白に見いだされるのである。この手紙のなかで、Drieu は自己とシュルレアリストとの共通の問題を明らかにすると同時に、自己の非政治的な立場を主張している。

《アラゴン、ぼくは君たちの運動が、ぼくの血のなかにある絶望、そしてぼくたちのまわりの多くの人々の血管のなかにうづくまっていると思われる絶望をあらわすのにふさわしいものと信じていた。……最近の十年聞のバリでの一激しい議論、不安定な足どり、恋愛への長い逃避、あちこちでの支離滅裂な著作——こうした経験の苦い残滓のなかに、ぼくがペンを浸しているとすれば、それはあまりにも真実であるようにいくつかの主張を激しく強調し、確認するためだが、君や君の友人たちは、そうした主張を君たちのポール・クローデル宛の公開状のなかで、まったく安易に捨てている。》

Drieu は親愛の念をこめ、Aragon をはじめとするシュルレアリストたちとの交際を顧みながら、彼らと自分を結んできた共通の基盤と共通の感覚が時代の社会と人間にたいする《絶望》であったことを強調している。第一次世界大戦に若い素朴な兵士として出陣し近代戦のもつ非人間的な脅威を三度の負傷によって、徹底的に経験し、死を直接のものとして見すえてきたような世代の若者たち、そして祖国の伝統的な文化の価値が、そうした自己の戦争体験によって、虚妄なものとしか思われなくなった若者たちが、他方では、すでに内部か

ら決定的な崩壊を——ブルジョワ社会の一元的な価値の体系の崩壊——よぎなくされていた社会に直面したとき、彼らが共通にもった感情は、デカダンスという絶望と虚無の感情なのであった。そして Drieu が、この時期にあって見きわめようとしていたものはそうした虚無と絶望におかれた人間の存在を自己にそくして探ることであった。

《ぼくが心から願っていたことは、君たちが文学者であるよりも、書くことが行動であり、行動のすべてが救いの探求であるような人間であることなのである》。Drieu にとっては書くことがいっさいの行動なのであり、書くことだけが絶望からの脱出を可能にする行為なのである。そのうえ、Drieu にとっての書くことは、自己の意識の底にたち戻ることのほかに考えられない。*Etat civil* の冒頭で、《私はある物語を語りたと思った。私はいつの日にか私の物語ではない別のことを語るができるのだろうか。……私は自分の頭をよぎることを書く。しかし、それにはある秩序が必要なのだ。私のなかに残されている神のようなものとは、そうした秩序なのである。》と彼は、自己の外側に脱け出していくことへの願望をもちながらも、自己の意識について語ることだけが、すなわち、私の物語を語ることだけが、救いの探求なのであり、《ぼくが救いを期待しているのは、ぼく自身と友人たちだけからなのであり》、したがって激烈な口調でシュルレアリストの政治行動への参加を否定しようとしている。彼はたしかに *Mesure de la France* を書き、ヨーロッパの荒廃からの再生を、ヨーロッパの統合という観点のなかに見いだそうとはしたのであったが、そうした外側からの文明批評によって自己の主体性を確立することができず、——この主題は後になって *Genève ou Moscou* (1928) のなかでふたたび展開されることになる——シュルレアリストの影響によって、それとは逆の方向によって、はじめて書くということの意味を見いだしていたはずであった。Drieu の生涯を考えてみるならば明らかなのであるが、この時期における彼は、政治とはもっとも遠い場所に身をおいていたのであり、この手紙のなかで Drieu が示している政治への態度は、シュルレアリストの行動への批難だけが先行しているだけで、きわめて曖昧なものと言わざるをえない。



シュルレアリストの政治への参加は《ところが突如として、君たちは隊列を離れ、最初の間道をとおってできるだけすばやく、あの踏みにじられた道へたち戻り、空虚な流れにながされた波の先頭に立とうとしているようにぼくには思われる》のである。彼は、シュルレアリストの政治の領域での関心のすべてを否定しようとしている。——コムミュニズム、アジア、中国、ソ連、リフ族などへの関心——そして《君たちは、こうした攻撃的なたわ言をふりかざしながら、君たちの必然的な深い嘆きをわれわれに忘れさせてしまうという許しがたい誤りをおかしている》のであり、一言にしていうならば、《君たちはわなにおちいり、レーニン万歳とわめきちらしている》にすぎないと Drieu は断言している。そして結局のところ自分の政治的な立場とは、かつての Aragon がそうであったはずの、《古い共和主義者》であり、《そんなわけで、ぼくも是々非々の立場をとっている。パンヴィル氏とフランソワ・ボンセ氏との中間にいるのだ。そして君に言うておくことは、最終的には、どちらかといえば、ぼくは国家主義的な共和主義者ともいうべきであり、他の人に言わせれば、アクション・フランセーズに影響され、カイヨ氏のような、近代主義的保守主義にいささかひかれている》としていることは、注目されよう。しかし繰り返して言うならば Drieu は政治に無関心であり、結論は、《そうしたいっさいを放置して、愛を歌うことのほうがはるかに重要なのである》とその非政治的かつ芸術至上主義的な立場を主張している。

この Drieu の手紙にたいし、Aragon の反論は、私信のかたちで書かれたものであったが、*N. R. F.* の次号、9月に Drieu の要請によって発表されている。この手紙は、もちろん Drieu の批判に答えたものであることは言うまでもないが、それよりも、Aragon の友人としての Drieu への直接的な感情がこめられていて興味深い。Aragon は《ぼくはもういちど、君の文章を読みなおしたけれども、むだなことだった。ぼくはあの文章を理解することも、君のなかで何が起きたのかも理解することができなかった》という率直な、友人 Drieu の突然の変化にたいする驚きの思いから書きはじめている。そして《もういちどよく考えてほしい、君がどんな連中と同盟を結びどんな連中と意見を同じく

しているかを。君のイニシアチブで、ぼくたちがあの恥ずべき小冊子『死骸』を發表したとき、同じ屑どもがぼくたちを山犬扱いにし、同じ犬どもが吠えて、官憲による取締りを要求したのだ。そしていま君が悔悟したのを見て奴等は君を歓迎しているのだ。》、……《ドリユ、君がそんなふうに、ひとかけらの理念も、道徳的基準もないような、知的流行、妥協的な精神に満足しているとすれば、それこそレーニン万歳なのだ》。Aragon は Drieu の立場をはっきりとアクション・フランセーズへの傾斜とみなし、Drieu のシュルレアリスト批判を意味のないものとみなしている。Aragon 自身もまたこの時点では、 Kommunismus の選択という、彼の生涯の岐路に立っていたのであった。しかしながら、この両者の手紙を読んでみても、革命と政治、政治と文学といった本質的な問題に関する論争がとりかわされているわけではない。むしろそうした問題に関する、両者の未熟さと混沌とした時代の状況がめだつのである。Aragon は、そうした時代の Drieu の生きかたを批判し、友人の動揺と混乱を指摘している。《真実のところ君をいらだたせているものは、ひとつの概念に到達しえない、君のいかんともしがたい無力さなのだ。》……《いったい君はぼくの友人だった男なのだろうか。その男は、悲痛な人間で、いかなる希望ももたず、人生にさいなまれつづけている決断のない男だった。》たしかに、この時期の Drieu が描いている人物たちは、すべてそうした人間なのである。いっさいのことに絶望し、酒と女に溺れながら、悲痛な嘆きを繰り返しいかんともしがたい出口のない生をすごしている人間たちなのである。

Frédéric Grover は 1962 年に Aragon と Drieu について対談し、いくつかの証言をひきだしている。1916年から1925年における Drieu は、後年の政治的展開を予見させるような特質をすでにあらわしていたかという質問にたいして、Aragon は《まったくそんなことはなかった。政治について、ドリユはまったく曖昧で、彼の言うことは信用できなかった。彼があることを言う場合には、彼はすくなくとも二つのことを、そしてまず自分が言っていることの反対のことを考えていた……事実、彼はいつでも政治では中間的な立場にたち戻ろうとしていた。そして私自身もまた、その当時は、政治にきわめて無知だった》<sup>(8)</sup>

と語っている。そして、皮肉にも、二人の交友のあいだ、Drieu にとってもっとも関心があったのは、女だったとつけ加えている。Drieu と Aragon が決定的に決裂するのは、1934年にいたって Drieu がファシズムへの道を明らかにするときである。しかしながら、Drieu にとってこうしたシュルレアリストへの批判は、新しい道をひらくことになる。『日記』のなかで、《ぼくは26年から35年にかけてコムニズムに接近していった。28年から29年以後、ぼくは事実上、社会主義者だったのだ》と書いているように、この時から、シュルレアリストが提起した政治と文学の問題を、自己の固有の問題として検討することになる。Drieu は1928年になって Genève ou Moscou のなかで、《問題の本質はといえば、行動と夢の深い関係なのである》と明らかにしているように、後の二つの手紙のなかで、政治と文学の問題を行動と夢という Drieu 独自のかたち  
のなかで追求することになる。

## 〔II〕

こうした行動と夢という問題を考えるまえに、Drieu にとってデカダンスとはいかなる意味をもっていたのかという点について、検討しておきたい。Drieu は、たしかに、戦後の絶望のなかに自分をおき、そうした絶望を見ずえることによって、*Plainte contre inconnu* や *L'Homme couvert de femmes* のような作品を書いたのであった。まず前者について言うならば、この最初の短篇集は、*Nous fûmes surpris*, *La Valise vide*, *Le Pique-nique*, *Anonymes* の四つの短篇から成り立っている。そこに登場する主人公たちには、《自分自身より他のことについて書くことができるとは考えられなかった<sup>(9)</sup>》と Drieu が後になって書いているように、おそらく20年代前半の作者自身が濃厚に投影されているように思われる。それぞれの短篇の主題や状況の相違にもかかわらず、そこには、Drieu 自身が直面していた生の問題が、直接的なかたちで語られていると言ってよい。Drieu という作家は、その生涯をとおして、自己の生の問題に執着しつづけ、そのことだけを語りつづけたのである。この時代の作品は、それがあまりにも自分にひきつけられていて、作品としての独立性にやや

とぼしいと言えるかもしれないが、人間としての Drieu の問題を知るためには、むしろそうした作品と作者の直接的な結合が、よりよく作者自身を明らかにしているのである。

作品の最初におかれた *Nous fûmes surpris* の冒頭において、Drieu は、戦争と青春について次のように書いている。

《それはぼくたちの青春の最後の日々だった。戦争とは驚嘆すべき失望だった。ぼくたちをその手のなかでだめにしてしまったのだ。ぼくたちは、運命がまずぼくたちにあたえ、それからぼくたちが選んだ友人たちを埋葬してしまった。》……《ある狭いそして深いところで、ぼくたちは行為を成し遂げたのだった。ぼくたちの流れている血のなかに、ぼくたちは驚くべき愛を見いだしたのだった。愛は溷れてはいなかったのだ。》……《しかし、すべてのひとが背を向けたのである。戦争は、平和のなかでの括弧にすぎなかったのだ。ぼくたちがいなかったあいだに、なにかがまた狂ってしまったのだ。大きな子供だった、ぼくたちは、不意打ちをくらったのだ。》

自己のすべてをそこに集中してきたような緊張の時が終ったときの驚きと空白について語ることからこの作品は書きはじめられている。そのとき、自己をとりまく、外部の世界は、突如として、一転し、まったく異った様相をあらわしはじめるのだ。自己はそうした変化に容易に対応することができない。ある時の終りによって、その前と後には、いかんともしがたい断絶があり、それによって意識は引き裂かれ、戦争の経験がなににもまして特権的なものであったがゆえに、たえずその分裂に苦しみ、そうした戦争の体験を固執しなければならない。若者は戦後という空白におかれたとき、苦い悔恨とともにその失われた青春を顧みなければならない。若者たちにとってすべてであったような驚異の時は、それは束の間の瞬間にすぎず、その他の人々にとっては、それは、たんなる《戦争》という《括弧》にすぎないのである。若者たちは、戦争というある時の終りに驚かねばならず、戦後という空白に驚かねばならない。彼らが感じている絶望とは、まずなによりも、青春の喪失への絶望なのである。

伝記的な事実について言うならば、Drieu は政治学院の卒業試験に二十歳の

時に失敗し外交官志望への道を絶たれ、翌1914年に入隊し、開戦とほとんど同時にアルデンヌに送られ、シャルロワで負傷する。それ以後負傷の回復にともないシャムパーニュ、ダーダネルス、ヴェルダンなどを転戦し、さらに二度の負傷を負っている。療養中に最初の妻 Colette Jeramec と結婚し、また第一詩集 *Interrogation* を執筆、出版したりしながら1917年の終りには、ふたたび志願して前線勤務に戻り、大戦中のほとんどを軍務に服している。

Drieu は、後年になって彼の作品のなかでも、もっともすぐれた作品のひとつであると思われる、*La Comédie de Charleroi* (1934) のなかで自己のかけがえのない戦争体験を回顧しながら、《ぼくはこの瞬間に生の統一を感じた。食べることと愛すること、行動することと思考すること、生きることと死ぬことは、同じ行為なのである。生とは唯一の噴出なのである。ぼくは同時に生きることと死ぬことを願っていた》と、書いている。Pierre Andreu は *Drieu, témoin et visionnaire* のなかで、こうした Drieu の言葉をふまえながら《ドリュは戦争において、生の統一性を見いだした。生と死、恐怖と勇気、行動と夢、苦痛と歓喜、すべてが、生の神秘的な尖頂をめざして上っていく者にとつては、おなじものの噴出なのである。<sup>(10)</sup>》と書いている。Drieu にとっては、戦争は《生の統一性》を見いだした、彼の生にとってかけがえのない経験であったと同時に、それはまた彼にとって書くことを、はじめて可能にした経験でもあったのである。*Interrogation* において、彼はただひたすら自己の戦争体験にもとづき、そこに見いだされた世界について語っている。*Interrogation* は、戦争の詩集であり、そこに見いだされた存在の本質にたいする問いかけの詩集なのである。

### 夢と行動

表にも裏にも至高の徴しを刻印した高貴な金貨があれば、ぼくは満足するだろう

人間の全的な力、ぼくにはそれが必要なのだ

精神による喚起だけでなく、眼と耳と手による勝利の成就も

これは *Interrogation* の冒頭におかれた *Paroles au départ* と題された詩の書きだしの言葉である。西川長夫氏も指摘されているように<sup>(11)</sup>、《夢と行動》という語が、強烈に端的に提示され、そこにこの詩のモチーフがこめられている。

あらためて行動が支配する

みずからの意志によって夢と行動を一体化しようとする賭に誘われた大胆な世代が立ち上がったのだ

若者は、高らかに、みずからの壮大な全人的な意図を歌いあげている。怠惰であり、孤独な夢想のなかで、自己の悦楽にのみふけりがちであった若者は、もはや《夢のたくするたんなる華麗さ》に充足しているような人間ではありえない。観念と体験、夢と行動という青春の現実において、分裂し、矛盾しあっていたものが、戦争という特権的な時間と空間のなかで、いみじくも驚異のよう一致するのである。そして書くことは、たんなる観念の展開でもなく、直接的な体験の記述でもなく、全人的な生の真実となる。Drieu は、たしかに、その一生をとおして、あるときは、孤独で怠惰な、デカダンスの文学者であり、またあるときは、行動し、人間の全体的な価値の実現を企てた知識人でもあった。この両極のあいだをさまよっている、ひとりの人間の姿に、同時代の人々は、むしろとまどいと奇妙な異和感を抱いていたとも言える。また、こうした詩句は、苦い従軍兵士によって戦時中に書かれたものでありあまりにも誇張されすぎているようにも思われる。しかし、なにはともあれ、Drieu の書くことの出発点が、こうした全人的なものの実現への希求であったことは真実なのであり、したがって、Drieu はその一生をとおして、こうした全人的な欲求に衝迫されることになる。

おお死よ、おまえの呼びかけは官能の呼びかけのように不安をあたえる  
その前触れの日に、出陣をまえにして兵士は決定的な観念をつくりあげ、

ぼくはすべてをおまえの運命的な求めにゆだねた

*Interrogation* のもうひとつのモチーフは死なのである。この 18 篇の詩を集めた詩集はそれらの詩が、四つの作品群にわかれているのであるが、その第一群は、前述の *Paroles au départ* のほかに、*Tryptique de la mort* と題された三つの詩篇を含んでいて、詩集全体のなかで、主題の提示部となっている。なお後年になって *Ecrits de jeunesse* (1941) に再録された同詩集は、かなりの部分に加筆訂正がなされており、Drieu にとって原詩集に提出された問題が、どのようなかたちで発展し、より明確にされていったかということが読みとれるのであるが、ここでは、*Interrogation* が、Drieu にとっての原体験であることだけを確認しておきたい。この詩集の第一の主題は生であり、第二の主題は死なのである。生の統一性一夢と行動の一致一の認識は、死の体験一予感と恐怖一と分ちがたく結びついている。自己を死という運命にゆだねたときから、生は限りなく新しい様相をあらわしはじめる。《死よ、おまえの姿なき不在にぼくは苦しんでいた。しりぞけられていた光明が溢れでるのには、おまえの影が必要なのだ》。死を受容することによって、生は《肉体と観念》の一体化された、われわれの存在そのものとして、あらわれる。死が存在の識別しがたかった深い暗部を明らかにするのだ。戦争においては、死は夜だけのものではなく、昼のものでもあるのだ。

そのうえ、Drieu にとっては、死は幼少の時から、ある特別な意味をもった、親しいものなのであった。《死よ、ぼくはおまえから離れていた。ぼくの幼少の時代は、おまえのさまざまな記憶の恐しさを知っていた》と彼は、戦争の体験をとおして、死についての記憶をよび戻している。死に直面しながら、自己と死をめぐって書かれた *Récit secret* (1953) のなかで、Drieu は、死にたいする痛切かつ甘美な凝視をくりひろげている。彼は生まれながらにして、憂鬱で人になじまず、物蔭に身をひそめ、自分に閉じこもり、夢にふけりがちな子供だった。《私は、自分のなかに私でないもの、私よりもはるかに貴重ななにかが存在していることを知っていた。そのことは、生よりも死のなか

で、はるかに甘美に味えるものだということを、私はまた予感していたのであり、家族から永久に離れ、どこかに行ってしまったり、それだけではなく、死んでしまった自分に夢中になっていることがあった》のである。彼はまた、子供のとき、台所にあった小さな切先の鋭いナイフを発見し、自殺の衝動に駆られ、恐怖に戦慄しながら、神秘的な悦楽を感じたりしている。彼は、その後、いく度も自殺を決意することになる。政治学院の卒業試験に失敗したとき、シャルロワの戦場において攻撃をまえにしたとき、はじめて女性に去られたときなど……生涯にわたって、死はつねに影のように彼の意識のなかにありつづけ、彼を虚無へと誘いつづけている。彼は死をとおして、現実の生を越えた永遠の生を夢想している。

*Interrogation* に戻るならば、生と死、行動と夢の一致という主題は、戦争という極限状況のなかでさまざまに展開され、《私が愛を知ったのは戦争によってだ》という愛の認識によって完結する。Drieu にとって愛とは、あらゆる人間と人間とのあいだにおける、その根底にある、本質的な結合を意味している。彼が戦場において、死をとおして知ったものは、現実においてはけっして出会うことのないような、人間と人間を結びつけている純粋な、愛なのだった。Drieu は *Gilles* (1942) のなかで、みずから死におもむこうとする主人公をとおして次のように書いている。《彼は満足して仲間たちを見つめていた。彼の人生における最後の喜びは、最初の喜びがそうであったように、自分自身のある一点に完全に集中し、張りつめた、それでいて冷静な男たちとの結びつきだった。かつて戦場の群衆のなかで偶然に出合った二人か三人の男たちが、彼にこうした充足をあたえてくれたのだった。……それは他者のなかで自分を愛し、自分のなかで他者を愛することができる奇蹟なのである。それはあまりにも束の間の、あまりにも魅惑的な奇蹟であり、やがて死だけが、その奇蹟が確実であることを証明することができるように思われるのだ。》 *Interrogation* のなかにこめられていた愛への祈念が、彼の青春の決算書であるような作品のなかでみごとに再生されている。

しかし *Interrogation* における《生の統一性》と《愛》の発見は、戦争にお



ける束の間の奇蹟でしかありえなかったものであり、直観的に把握されたものであったがゆえに；かけがえのないもの、唯一のものとして、Drieu の生涯をとおして、死とともに、彼の存在を衝迫することになる。*Ecrits de jeunesse* の序文のなかで、Drieu は自己の思想が一貫したものであることを強調しながら《こうした思想の動きは、私の初期の頃から明らかである。戦争のあの喜びと充足の束の間の感動のあとで、戦争が終る以前にさえ、私の眼は平和に向けられ、私は暗澹となった。文明の疲れはてた諸領域に直面すると、私は恐怖にとらわれた。まず、厳しい、絶望的な判断が、私のなかに形成されたのである。》ここには、かけがえのない体験によって、ひとつの時代を生き、そしてひとつの歴史を完結させた世代の悲劇が告白されている。文明という現実のなかに、ふたたび投げだされた若者たちにとって、幸福な充足した生の統一性は、絶対にたち戻らない。彼らは、自己と他者、自己と社会との分裂と矛盾だけではなく、自己の存在の内なる分裂を、たんなる観念としてだけではなく、いかんともしがたい、もっとも深いところにおいて、感じなければならない。*Plainte contre inconnu* や *L'Homme couvert de femmes* において描かれているものは、こうした深部における分裂であり、それにたいする嘆きなのである。Drieu はこうした分裂をいつまでも見すえながら、そして失われた人間の統一性を夢想するだけでなく、行動によって社会的に実現することを企てながら、ジルの死がそうであったように、自己の生を賭け、みずから死に到達することによってのみ、その分裂を越えることが可能なのであった。

*Nous fûmes surpris* のなかで、主人公たちが向いあっているのは、そうした自己の内部の空白であると同時に、戦後のブルジョア社会の価値観の変動と崩壊による空白でもあった。《1919年5月1日、ぼくはアランとパリの街をぶらついてた。革命と反動のあいだで自分を決定するための最後の時を、ぼくたちは待っていた》。若者たちが直面しているのは荒廃した風景なのである。若者たちは、自己を確立し、社会の変動に対応する確固たる観念を持つことはできない。Drieu の友人 Emmanuel Berl が語っているように、戦争の終りから20年代の前半にかけて、若者たちは、新しい人間と新しい社会にたいする幻

想と希望をシュルレアリズム、キュビズム、レーニン、フロイト、マルクス、アインシュタインなどの名前とともにかきたてられながらも、伝統的な文化と思想との間に自己を引き裂かれ、不安と絶望につつまれ、デカダンスを彷徨せざるをえなかったのである。

*La Valise vide* のゴンザグは、そうしたデカダンスのなかで、出口のない不安にさらされながら、空白を生きている。*Nous fûmes surpris* で戦中と戦後の断絶を描いた作者は、この短篇では、友人のシュルリアリスト、Jacques Rigaut の姿に自己を重ねあわせながら、ゴンザグによって、1920年代前半の虚無的な青年の像をつくりあげている。Dominique Desanti は *Drieu La Rochelle ou le séducteur mystifié* のなかで、次のような Philippe Soupault の言葉をあげている。《いつでもドリュは自分のなかで我慢のならないすべてのものを、自分にもっとも近い人間、友人や愛する女性にたいして吐きだすのだ。われわれのなかにある退廃的なものをいっそうはっきりと示すために、彼はひとりの総合的な人物をつくりだしたのである。<sup>(13)</sup>》Drieu 自身もまた 1929 年に自殺した Rigaut にたいし哀惜の念をこめた文章 *Adieu à Gonzague* のなかで《長いあいだ、ぼくはゴンザグにたいする弁明を書きたいと願っていた。『空っぽのトランク』のなかで君をとおして行ったわれわれの意識の検討は不十分なものだったことが、ぼくにはわかっていたのだ》と書いている。そして、彼はあらためて、暗い、混迷にみちた、酒と女のデカダンスに別れを告げるためであるかのように、*Le Feu follet* (1931) を書き、《空っぽのトランク》のようであった退廃と絶望の意識をより鮮明に、再検討することになる。

*La Valise vide* では、語り手の私とゴンザグは酒場から酒場へと遊蕩をつづけながら若者の精神の状況についての対話を展開する。ゴンザグは《身体の障害》に苦しみ、そのために《自分を、孤立した、異常な、不潔な、滑稽な、人生にたいする権利を奪われた人間だと感じている。》この身体的障害とは、Drieu 自身が戦時中にダーダネルスからの帰還の途中で悩まされたように、性病であろうと、Desanti は想像している。<sup>(14)</sup>ゴンザグは、そうした病だけではなく、麻薬にも冒されている。ゴンザグは、まず、肉体の内部をむしばまれており、そ

うした崩壊によって無力感になやまされ、社会と他者から遠ざけられ、孤独なのである。そのうえ、彼は金もなく、若者たちにとって共通の最大の関心の的である女性たちにも近づくことができない。彼は文学的な成功を望んで、いくつかの文学サークルに接触はしていても、書くことはできない。それだけでなく、一言にしていうならば、ゴンザグは無知なのである。過去について知らないだけでなく、現在の問題についても無関心であり、本も読まず、絵画も見ず、音楽も聴かない。彼には窃盗癖があり、酒場から手あたりしだいに、品物を持ち帰ったり、特殊な缺で地下鉄のなかで他人の洋服のボタンを切りとったりする。要するに、《彼はもっとも空しい行動を愛している》のである。ゴンザグは、みずからおちこんだ空虚な退廃のなかから、脱出を可能にするような、いかなる方法も手段も見いだしえない。彼はそのための、人生にたいする全体的な観念や体系的な思想をもちえない。時代の要求するものは、伝統的な合理主義の価値観と美意識の徹底的な否定なのであり、《いかにしても、統一性と連続性を破壊しなければならない》のである。*Adieu à Gonzague* のなかで、この時代を顧みながら、Drieu は、《ぼくは君が空っぽのトランクをもって街に投げだされたのを見ていた。ぼくはそのトランクを充たすために君になにを提供したのだろうか。》と、Drieu 自身もまた、無為と絶望に苦しみつづけた、おなじデカダンスの世代のひとりであったことを認めている。

*Le Feu follet* のアランは、はるかに追いつめられ、あれかこれかという、絶対的な状況に直面している。彼は、生きることか死ぬことか、そのどちらかを選ばなければならない。Drieu は、自分が弱い人間であるがゆえにこそ、しばしば、自己をそうした状況に追いこんでしまうように思われるのだ。彼は長いあいだ、自己を孤独な状態において、ある永遠なものを探求するような型の人間ではない。彼はアランによって、彼自身がおかれていた絶望とデカダンスから脱出しようとしている。アランは麻薬中毒者であり、麻薬によって、いっさいの現実から隔てられ、現実のなかで生きる意志を奪われている。麻薬中毒者は、彼らの閉ざされた世界にだけ生きているのであり、アランは自己の虚無を生きている。彼は、そのなかでみずからの宿命を凝視しなければならない。

彼は文学に絶望し、——彼にとっては生きることの唯一の可能性——世界にたいするあらゆる観念を放棄している。アランと同じ時代を共通に経験した若者たちは、すでに《希望と幻影によって自己の行為の平衡》をはかろうとして、現実の人生に生きる道を発見し、復帰している。彼らは、《確かめえない世界にあって、自分に残されているものを救うために、その生命力を他の場所へ移しはじめる》のだ。しかし、アランにとっては、幸福な平衡はありえない。生きることは、まったくそれとは別のものであり、彼は絶対の欲求にとらわれている。《アランの情熱といい、狂気というものは——それは一度も実現されたことはなかったが——人はただひとつの道だけを生きることができ、あらゆる思念を自己の行動のひとつひとつにかかり合わせるができることと考えることだった。そうすることができないために、彼は死を求めている。》アランが求めているものは、夢と行動の一体性なのである。ここでは、戦争という極限状況のなかで体験された、幸福な生の統一性が、現実において実現できないものであるがゆえに、麻薬という閉ざされた世界のなかで、否定的に死によって、成就されようとしている。麻薬だけが、虚無において、アランの生きる意志を否定することによって、生と死との一体化を可能にしている。アランが孤独と絶望のなかで、いっさいの行為を奪われ、絶対の無為に到達したとき、自殺は、はじめてアランにとって人間的な行為としての意味をもつことになる。自殺とは《他にになにも成し遂げえなかった人間たちの行為》なのであり、それが唯一の残された、選ぶことのできる行為であるがゆえにこそ、それは《信条》であり、《仲間の人間への信頼、彼らの存在や自我と他のいくつもの自我との関係の实在性への信頼》をあらわすことになる。かつて、戦場にだけ見いだされた愛は、現実においては、死によってしか見いだされない。アランは死にのぞみながら、愛を渴望している。《ぼくがやりたいと思ったのは、人々を捉え、手放さないで縛りつけておくことだった》にもかかわらず、それは絶対に実現されることのない願望だったはずである。それだけではなく、アラン自身にとって——Drieu にとって——なにかがつねに彼と他者とを隔てているのだ。《ぼくは人々を愛さなかったし、愛したとしてもいつも遠くからでしかなかった。

だから愛を眺めるのに必要な距離をおこうとすると、ぼくはいつも人々から離れることになったし、あるいは彼らをぼくから離れさせることになってしまった》とアランは告白している。

*Le Pique-nique* や *L'Homme couvert de femmes* の主人公たちが繰り返しているのは、こうした愛の不在への嘆きなのである。はるか後年になって、Aragon が *Aurélien* で、愛の絶対の探求者であるがゆえに、不毛の無為の青春をおくことをよぎなくされる若者の像を Drieu を念頭におきながら描きだしているように、これらの主人公たちは、けっして現実の女性に近づいても、真実に女を愛することはできない。*Le Pique-nique* のリェシーは、愛する女性を前にして、たえずためらいを感じている。彼は女性の側からの求愛を期待してはいても、みずから情熱にゆだねるようなことはない。ひとりの女性を愛するためには、自己の一部を破壊し、自己本来の希求を放棄しなければならないことを怖れているのだ。自己のよりどころである孤独の自由が失われ、《よりどころのない、このうえなく緊張した情熱のうちに自分をつねに維持するという無謀な試み》を怖れている。彼は対象からある距離をたもち、虚無的でシニックな仮面のもとで振舞っている。彼は他者から拒否されることを怖れているし、他者の行動や言葉をぬきさしならない直接的なものとして受けとることを拒否している。女は身を投げだそうとし、《言葉より叫び》をと言いながら《あなたは、私を理解しようと一度でも努力したことがあるのかしら》、《あなたって人はけっして自分から脱けだしたことがない》のだと批難している。彼は自分を他者にゆだねることはできないのだ。彼はふたたび、孤独にたち戻り、《未知なるものへの嘆き》を繰り返しながら、絶対的な愛を夢想せざるをえない。

*L'Homme couvert de femmes* のジルもまた同じような男である。ジルは多くの女たちと接触をもち、女たちに覆われている。しかし、そうした女たちは、ジルにとって、いかなる意味をもつのだろうか。女から愛撫を求められたジルは、《そんなことは、すべてぼくを怖れさすのだということが、あなたにはわからないのです。》と女の求めを拒否し、《ぼくには人生にたいし、なんの

力もないのだ》という無力感におそわれ、突如として不安と絶望におちいり、酒場にかけこんでしまう。女たちとの接触は、そのたびごとに彼の不安を増大させ、孤独においこむにすぎない。Drieu にとって、女性はたしかに青春の抑圧された欲望の対象であり、若者たちの大部分がそうであったように、《他人のベッドで何が起きているか》は、共通の関心事でもあった。若い時代の Drieu が女と酒に耽溺した生活を送っていたことも事実であった。しかし、*Plainte contre inconnu* や *L'Homme couvert de femmes* におけるモチーフのひとつは、明きらかに、女たちへの愛の不在なのであり、欲望と愛の祈念に引き裂かれた男の不安と絶望なのである。だからといって、Drieu はけっして女を離れることはできない。アランについて、《女たちは社会と自然を結ぶただひとつの君の絆なのだ》と Drieu は書いている。現実の社会において生きるために、いかなる手段をも見だしえないような男にとって、女は男を有効に社会に繋ぎとめることのできる唯一のものなのである。Drieu の小説の主人公たちは、アランのように、《女は金であり、隠れ場であり、彼を身ふるいさせるすべての困難の終りを意味していた》といったような発言をしばしば繰り返している。しかし女によって自然の欲求とともに人間的な欲求が充足されようとするとき、彼は被害者の立場に追いこまれざるをえない。女は、たとえ彼女たちがどのような女であろうとも——富裕な女であろうと娼婦であろうと——彼女たちは同じようにブルジョワ社会に属しているのであり、彼女たちが有効な存在であればあるほど、彼女たちが Drieu に求めているものが、そして彼女たちの現実の愛が Drieu を傷つけ、迫害することになる。Drieu は、けっしてひとりの女性を長く愛することはできず、だからといって、孤独に耐えることもできず、女性を遍歴することになる。

こうした Drieu のマゾヒズムは、彼自身の生い立ち、すなわち、彼の意識の形成とも深いかわりをもっているように思われる。彼は *Etat civil* のなかで、その幼少時代の愛の経験について、いくつかのエピソードを語っている。なかでも、Pierre Andreu, Frédéric Grover の Drieu La Rochelle のなかでも指摘されているように、母の不在にたいする恐怖について語られているのが、

注目される。それは三歳のときの経験であり、幼いピエールの母は、夕方になると連日のように外出し、ピエールはひとりにされ、母のいない部屋のまわりで、恐怖におびえなければならない。しかし彼は、母親を愛するがゆえに、勇気をふるいおこし、物笑いにされることを避けたいという羞恥心から、その恐怖と悲しみに耐えねばならない。彼は、自分が愛するほどには、母によって愛されていないという最初の絶望と孤独を感じざるをえない。同時に彼は《若い母の快樂のために自分を犠牲にすることに熱烈な喜び》を見いだすことをよぎなくされるのだ。《私は母の若さ、性、香水、愛情にあふれた優美さを愛していた。同じ実体のなかに混然とし、私たちはまだはっきりと分離していなかったのだ》と Drieu が書いているように、母は未分化な自己と一体化した存在であったにもかかわらず、ピエールは父によっても母と隔てられなければならない。ピエールは、父とはつねに厳しく区別され、遠ざけられている。《私はたまにしか父を見なかった。私はひそかに主人をいつくしむような奴隷の卑劣な愛情を抱きながら父を怖れていた》のである。父はそれだけではなく、時として母と子のあいだに侵入し、暴力的に、母と子を分裂させ、子を恐怖と孤独に追いやる存在でもある。自己と他者、自己と自然の調和と統一のもとにあった幸福な幼少時代の神話はこのようにして崩壊していく。Drieu にとっての *Etat civil* とは、自己と他者の分裂と自己の運命の発見の意識の形成の記録なのである。

さらにもうひとつ、少年の意識にある決定的な傷を残したのは雌鶏ピガレットの死である。彼は祖母からあたえられた小さな雌鶏を熱愛していたのであるが、ある時、その脚の表皮が汚れているのを見て、その皮を爪ではぎ取ってやろうとする。しかし、脚を傷つけられた、小さな鶏はびっこをひき、飛ぶこともできない。鶏の弱りかたに不安になった少年は、それを藁のなかに隠してしまう。その数日後に、父の手によってテーブルの上に置かれた鶏の死骸を見て彼は愛するピガレットの死を知るとともに、自己の犯した行為とその意味を理解する。彼ははじめて許しがたい犯罪を犯したのであった。そして、その時から世界は一転する。彼は《すべての世界がわたしに対立し、圧倒し、殺人者の

不安にみちた、尊大な孤立を知った》のであった。彼は、自分がもっとも愛していた対象に、それを愛するがゆえに、漠然とした敵意のようなものに駆られ、自己の意志に反しながらも殺すという罪を犯してしまったのである。彼はこのとき、はじめて自己の内なる悪を発見し、他者と対立することになる。そして彼は加害者であると同時に被害者なのである。彼は自己が犯した行為によって、自分を責め、そのことによって苦しまねばならない。《私は当然ながら皆の意見にしたがったとはいえ、私の心の底には暗い隠れ家があってそこではなにか納得できないものがあった。長いあいだ、私は自分の行動や言葉を完全に表現すること……などに苦痛を感じる》ことになるのだ。彼は一方では、《孤立》を昂然と感じ、社会と対立しながら、他方ではそうした対立によって疎外され、他者との交流を奪われようとしている。

*Etat civil* では、Drieu の眼は、ひたすらこうした意識の内部の分裂に向けられている。Drieu にとって、分裂は、戦争が抵抗しがたい外部の力であったように、つねに自己の意志に反し、外部のなにものかによって惹起される。それは、彼にとっては、ひとつの宿命なのであり、彼はそうした宿命を予感するとともに、ただひたすら内面の暗部を透視しようとし、そのことの困難を嘆くのだ。《愛とは孤独を求めることであり、熱狂的に自己をみずからにゆだねることであり、自己を牢獄に閉じこめ、鉄格子の彼方へ鍵を投げだすことである》。彼は、最初から、愛によって充足することを妨げられているのであり、愛することは、彼にとって孤独な行為でしかありえない。彼は愛を求めることによって、傷つき、孤立し、反対に他者から離れていくのであり、夢と行動は、現実においては、つねに相反しており、彼はつねに一方の極から他方の極へと向うことになる。

*L'Homme couvert de femmes* のジルは、こうした自己の傷つけられた意識によって、女たちに近ずきながらも、たえず女たちから隔てられ、なおいっそう傷つけられ、そのことの虚しさに絶望している。結局のところ、ジルはひとりの女性の愛を手にいれ、すべてが終り、前途に希望をもとうとするやいなやもうひとりの女が突如としてあらわれ、愛を完結することはできない。しか



し、ジルが思っているのは、そこに登場した現実の女ではなく、過去の彼女なのであり、それが過去のものであるがゆえに、つねに《時間の外にあって》、夢のなかに想起されるような愛なのである。しかも、その愛は戦争のもので、束の間の体験として成就されたものなのである。《私たちは、或る夜、この世でもっともあわれな部屋で、涙と血と星の完全な融合に到達した》のであった。愛とは、人間と人間との一致だけではなく、人間と自然の一致であり、そして人間がみずからの宿命と同化する瞬間なのであった。《ジャクリーヌは怖れていなかった。彼女は母親の狂暴な動作で、私を胸に深く包みこんでいた。》《私たちは、この短い時間に、男と女が愛しあうことができるように、愛しあった。脅かされ、取り囲まれ、滅びながら。死と快樂がやがて同じ顔にあらわれた。ジャクリーヌの抱擁は抗いがたいほどに新鮮で、私たちが別れを告げようとしたこの生が、刻々の瞬間に、ある絶対の価値をもっていたという感情、そして同時に、私たちはともに死の敷居を飛びこえ、無限の生涯へと喜びにあふれて身を投じようとしているのだという感情を、私にあたえたのだった。》

こうした愛は、すでに *Interrogation* において、Drieu が高らかに直接的な喜びと力をこめて歌いあげようとしたものであるが、ここでは、出口のない絶望にとらわれた、デカダンスを生きる若者の意識の底から、突如として啓示される。ジルによれば、それは肉体に属するようなものではなく、《抽象的な一点》にあるものであり、彼の内部において生にたいする確信として存在しつづけており、そのことが、反対に、ジルの現実の生の障害となっている。彼は、現実の社会や他者を虚偽のものとして、信じることができない。しかし、*Le Feu follet* のアランが、麻薬という手段によって、あらゆる生を自発的に否定し、死に到達したのにたいし、ジルは生きなければならない。アランにとっては生きることの唯一の可能な道として暗示されている《書く》という行為をとおして、ジルは生きつづけねばならない。《私は、私の生を夢想することを放棄しないし、私の夢を生きたいのだ。そして夢のなかにこそ……すばらしい現実を見いだしようということを知っている。》とジルは、みずからの生への確信を

強調せざるをえないのである。

1920年代前半の、Drieu の初期の作品を生みだしているものは、こうした《夢のなかにこそ真実の生を見いださう》という確信なのであり、Drieu はそうした確信をシュルレアリストとの共通な認識として、時代の同じ道を歩もうとしてきたはずであった。ブルジョワ社会における伝統的な一元的な価値の崩壊、戦争によるヨーロッパの文化の荒廃と危機、という一般的な状況のなかで、マルクス、フロイトなどの新しい展望が開かれていこうとする混沌のなかで、自己の主体性を確立する基盤となるような観念を明確にできなかった、世代のひとりである Drieu は、歴史的には、伝統的なものと新しいものと、そして、体験的には、戦争の前と後の断絶と分裂に悩まされているのであり、そうした断絶の空白こそ、Drieu が生きたデカダンスなのであった。しかしまた一方では、1920年代のデカダンスとは、つねにその内部において、新しい時代、新しい文化への再生をはらんだデカダンスでもあった。それは、革命という言葉が、精神の領域でも、現実の社会の領域においても、みずみずしく、あらゆる希望をはらんだ意味をもってひびいてくるような時代なのであった。Drieu は、1930年代の行動する知識人としての生きかたとは、対極のところにも身をおいて、ただひたすら、自己の深部にゆるぎない、否定しがたい体験としてよみがえってくる生の統一性という確信を、ひとつの思想にまで展開していかなければならない。そして、Drieu 自身が、生の統一性という問題を、夢と行動という彼の独自のかたちで、検討することになるのが、シュルレアリストが提出した革命の問題であり、行動と文学の問題をとおしてであった。

### (III)

Drieu のシュルレアリストに宛てた後の二つの手紙は、1927年2月と7月に *Les Derniers jours* 誌に発表されている。この雑誌は、Drieu が友人の Emmanuel Berl とともに発行した個人雑誌であり、*Cahier politique et littérature* という副題が示しているように、政治と文学についての時代の問題へのアプローチであり、すでに Drieu が政治への接近をひそかに準備しつつあ

りながら、なお明確な態度を決定しえず模索を重ねているその過程がそこによくあらわれている。Drieu はこれらの手紙のなかで、シュルレアリストの政治への参加、コムニズムへの傾斜を批判しているのであるが、手紙の内容を考察するまえに、1925年から27年にいたるシュルレアリストにおける革命の問題について、略記しておきたい。

1925年に、リフ族の叛乱を契機として、シュルレアリストが *Clarté* のグループと急速に接近したことはすでに述べたとおりであるが、同年10月の *La Révolution surréaliste* 誌には、*Clarté* と Henri Lefebvre や Georges Politzer などの *Philosophies*, Camille Goemans や Paul Nougé などのベルギーのシュルレアリストの雑誌 *Correspondance* と Breton のグループの四者の協定による、モロッコ戦争への反対を表明した、《まず革命、そして常に革命を》と題された宣言が発表されている。この宣言において、彼らは、西欧文明のあり方を厳しく批判しながら、《われわれは精神の反抗である。われわれは血まみれの革命を、あなたがたの行為によって踏みじられた精神の避けがたい復讐だと見なしている。われわれはユートピストではないのだ。この革命はわれわれにとって社会的な形態においてのみ考えられるのである》<sup>(16)</sup> と断言している。この宣言は、後年になって、Breton が *Qu'est-ce que le surréalisme?* (1934) のなかで《一個の考え方との全面的決裂を示すもの》であり、《運動のその後の方向全体を決定する》ものであったと述べているように、シュルレアリストたちの政治と文学にたいする態度の確立にとっての重大な契機であった。

そして、シュルレアリストたちは、1926年になって、彼らの一員でもあり共産党の黨員でもあった Pierre Naville の問題提起によって、より明確な態度の決定をせまられることになる。Naville は *Que peuvent faire les surréalistes?* なるパンフレットを発表し、それまでのシュルレアリストの態度を批判し彼らの革命にたいする運動は、たんなる文化的領域にとどまるものであり、真のプロレタリア革命をめざすものではないとし、次のような二者択一を求めた。すなわち第一の道は、《アナキー的な否定的な態度、みずからが標榜する革命の理念を正当化しえないがゆえに先験的に誤った態度であ

り、みずからの存在そのものと個人の聖なる性格を階級闘争の規律ある行動を導いてゆく闘争のなかにひきこむことを拒否する態度を固執する》ことであり、第二の道は《革命の道——唯一の革命の道、マルクス主義の道——に断固として参加していくことである。それは、個人の総体であり部分である実体として、精神の力が、それが実際に仮定している社会的現実と緊密に結びついたものだということを理解することなのである。》<sup>(17)</sup> Naville は、シュルレアリストたちにたいして、革命の実践をきびしく求めたのであった。これにたいし、Breton は1926年9月に *Légitime défense* を発表して、答えている。そのなかで、Breton は、Naville の問題提起について正面から答えることをせず、革命の原則を基本的には認めながらも、フランス共産党の敵対的な立場への攻撃にすりかえることによって、自己の立場を正当化し、シュルレアリストの自主性を維持しようとしている。《事実の領域においては、われわれの側にはいかなる曖昧さもありえない。われわれのうち唯一人として、ブルジョワジーからプロレタリアートへの権力の移行を願わない者はない。だからといって、われわれは、それまでの間、内的生活の経験を追求していく必要がないとは考えていないのであり、そして、この内的生活は、当然、たとえマルクス主義者からであろうと、外的規制をいっさい受けつけないものなのである。》<sup>(18)</sup> Breton はシュルレアリストの活動を、なんらかの党派の支配にゆだねることを拒否し、シュルレアリストの自発性を維持する方向をめざしている。すなわち、彼は、いっさいの革命が、歴史の必然的な運動であることを認めながらも、政治の優位性を拒否している。

しかしながら、1927年には Naville の提出した問いかけに対応するかのように、Aragon, Breton, Eluard, Péret, Unik の五名が共産党に入党している。彼らは、みずからの決定を弁明するために、*Au grand jour* <sup>(19)</sup> を発表している。このなかで、彼らは、まず《われわれおたがいの気質の違いによって、われわれ全員が共産党に入党しなければならないと信じたのではないにしても、われわれの唯一人として、コミュニストたちと自分との間に存在する願望の偉大な符合を否定することを、みずからの任務としようとした者はいなかった》と、基

本的には、革命の実践について、コムニストへの同意を明らかにしている。そして彼らは、《マルクス主義およびその結論の考察によって、われわれはひとつの確固たる組織の存在に直面させられたが、シュルレアリストたちは、その組織にたいし、革命的次元で対置すべきいかなる組織ももたなかった。なぜなら、革命というものは、あらゆる革命的な意志が奉仕すべき、革命の実現へ向っての具体的行為としてしか考えられないものだからである》<sup>(19)</sup>と革命における組織の問題を定義しながら、共産党への入党をシュルレアリズムの発展と自律性を保持するための唯一の手段だとし、《シュルレアリズムの思想の発展の論理的結果》であると主張したのであった。

シュルレアリストたちにとって、とりわけ Breton にとって、革命における文学の自律性の確立という問題への決着は、1929年の末における、《第二宣言》まで待たねばならないのであるが、以上に簡略に事実だけを述べてきたように、1927年においては、彼らは、共産党への入党という具体的な行動——彼らの自主的な行動への留保をとどめながら——へ踏みだしていたのであり、そうした状況の展開を見ながら、Drieu の第二、第三の手紙は書かれている。第一の手紙が、唐突で、論理性に欠けていたのとは異って、これらの手紙においては、Drieu は、みずからとシュルレアリストとの関係を、彼らへの愛情をこめながら、冷静に分析している。このことは、Drieu がすでにシュルレアリストの直接的な影響から離れ、独自の道を歩みはじめていたことを示していると同時に、それまでの自己の文学にたいする批判をも含んでいると言える。Drieu は、シュルレアリストが提出した革命における理論と実践の統一、社会的、経済的な問題と文学・思想の自律性といった、その性急な解決が多くの矛盾をうみだすことになった問題を、Drieu 独自の、《夢と行動》というかたちにおいて、思想と行動の根源的な意味での一致をめざし、検討しようとしている。この場合、Drieu はあくまでも革命という観念を認めようとはしないのであり、シュルレアリストとはまったく異った次元において、彼らを批判しようとしているかのように思われるのであり、また、別の観点にたつならば、この両者を隔てている論点の相違が、かえって、政治と行動という問題の意味をより本質

にそくして明らかにしているとも言えるのである。

《夢と行動の一致》とは、Drieu にとってなにものにもかえがたい、戦争の体験であった。第二の手紙のなかでも Drieu はそのことを強調しながら、Aragon, Breton, Montherlant などが、《ある時期の私を特徴づけているように思われた戦争へのノスタルジーをあれほど軽蔑したのだろうか》と反問し、彼らの世代の根底にあるものは、ひとしく戦争体験であり、《この根源的な情熱のはけ口が奪われていることが、現代の人間の悲劇のひとつである》と、すでに検討してきたように、自己の文学のそれまでのモチーフを明らかにしている。しかし、Drieu は戦争をたんに讃美しているわけではない。彼は戦争それ自体と戦争体験をきびしく区別しているのであり、近代戦争の特質を、《官僚的な軍隊と金属と化学産業の戦争とは、戦うことへの要求の醜悪なカリカチュールであり、恥ずべき裏切りなのである》とはっきり認識し、Montherlant のような場合は、《戦争の精神と現代がわれわれに課しているような戦争との、冷酷な矛盾を感知していなかったのだ》と批判している。彼にとっては、《戦争の精神》とは、生と死、夢と行動の幸福な一致が見いだされ、そこに愛が成就されるような体験のなかにあるものなのであった。そして、そうした体験にもとづいた、全体的な人間の回復への希求こそ、彼の生と文学を根底から支えるものであった。

こうした観点から、Drieu は戦後のシュルレアリストにたいする自己の認識をあとづけようとする。《しかしまもなく、ブルトンやその他の連中もダダを離れた。夢の波があらわれたのである。それはシュルレアリズムの時代だった。同じように表面的な観点が問題にされたのではなかった。この時から、行動は思想の運動そのものとして、より深い意味で理解されたのだった。思想にしたがって、より内面的なものになっていくような冒険に、人々は駆りたてられたのだった。その時、真に、人々は文学から脱出したのである。なぜならば、彼らの汲みつくせない源泉である魂にまでたち戻ったからなのだ。この時、私は、驚くような関心をもって、パリに生きる唯一の人間の大胆な試行錯誤を追跡し、希望と愛に慄えたのだった。》

Drieu はシュルレアリストたちの運動への讃美と期待を愛情をこめて語っている。彼が、体験として行動することによって到達した全体的な人間の統一性の回復への可能性が、書くこと、考えることをとおして実現されるのだ。彼は、直接的な行動から自己を引き離し、自己の内部にたち戻っていくことによって、そうしたみずからの生の要求を成就しうるはずなのである。Drieu はシュルレアリストによって、思想それ自体の内発的な自律性を知ったのであり、政治と文学という次元でいうならば、文学を政治と行動から切り離し、孤独な自己にたよることによって、彼は、はじめて、書くということができたのであった。しかし、彼がようやくにして自己の生と文学の方向を決定しようとしたとき、彼をその地点にまで導いてきたシュルレアリストたちが、革命という直接的な、政治的行動を指向しようとしているのである。Drieu は、そうした時代の動向にはあまりにも敏感なのであり、彼はそうした情勢をけっして無視することはできない。彼はまた《思想と行動の二律背反》という古典的命題にたち戻らないわけにはいかない。彼が Breton や Aragon たちの運動に願っていたものは、人間の全体的な統一の回復なのであったが、そういう意味では、シュルレアリストたちが革命の実践という課題をとおして企図していたものと、究極においては同じ地平をめざしているにせよ、Drieu は、この時点においては、まったく反対の個人的な、非政治的な道を歩もうとしたのだった。

しかしながら、Drieu の場合には、シュルレアリストの革命への道という論理的、思弁的な方法によるアプローチとは異って、体験的に、そしてより本質的に文学と生とは、区別しがたく結びついている。Drieu にとって、文学とは *Interrogation* がそうであったように、生の要求そのものなのである。したがって Drieu は、第三の手紙の冒頭でシュルレアリストたちに次のような期待をかけている。シュルレアリストとは《ある共通の信条》、すなわち《美とは明白なものにされた生の力であり、戦う者のすばらしい友情によって日常的なものと同直接的なものなかに実現されるべきであるという信条》にもとづいて結合されていたはずであり、彼らにとっては、《美》とは《骨肉のものであり、競争に駆られ、高揚するような友愛心なのであり》、《そうしたことこそ、もっ

とも確実な価値をとおして実現された真実の生なのである。》これは、まさしく、Drieu 自身の信条告白なのである。Drieu にとって、《人生》とは《こうした友情を知る》ことなのであり、それが《生きる》ことなのである。こうした人間への愛は、あらゆる芸術の源泉であると同時に、《芸術の主題》でもある。Drieu にとって、芸術とは《緊急にして直接的な》ものなのだ。芸術と生とは、《愛》という人間の根底にあるものをとおして、離れがたく結合されている。あらゆる芸術 art とは、それらのなかでもっとも根源にある生きかた art de vivre のさまざまな様相を表現したものにはかならない。芸術とは、他者によって遂行された行為を表現するという《行為》なのであり、したがって芸術家とは行動する人間である。なぜならば、行動とは愛に支えられて生きることを意味しているからである。

しかし、Drieu 自身は、そうした全人的な価値を実現しうような愛からは、あまりにも遠く離れたところにいたのであり、愛の不在に苦悩する孤独な魂の放浪こそ、彼がそれまでに描きつけてきた主題なのである。彼は、それだけではなく、それゆえに行動を失った人間を描いたのであったが、そのとき、Drieu にとって成就しうる行動とは、孤独な夢のなかに自己をゆだね、書くという行為に没頭することだけであった。第三の手紙は、シュルレアリストの周辺にありながら、その孤立した立場をまもりつづけた Drieu の弁明の記録でもある。

彼は、そのために、シュルレアリストたちと自分との文学的素質の差異などにも触れながら、その決定的な理由として、文学者の孤独、集団になじまない、独自の作業ということを強調する。

《私には、唯一人でしなければならない仕事があった。私の個性を意識し、やがてそれを乗り越えることである。しかし、それは君たちの各人にとっても同じことではなかったのだろうか。この個人的な仕事は、それだけ共同体から離れることであり、共同体に反し、それに対立することによってしか遂行しえないものである。君たちは一致しているように見えても、君たちの一人一人は、全体にたいして、自分をすっかり譲りわたしている。したがって君たちは、た



がいに欺いていたのであり、同じように、私が君たちに参加していれば、私は君たちを欺くことになっただろう。私はそんなふうに、君たちを欺くことも、君たちによって欺かれることも願っていなかった。私が願っていたのは、君たちが私にすべてを与えてくれることであり、私が君たちにすべてを与えることだった。》

自己と他者の完全な一致の願望。行動とはこうした愛の実現をめざすものであり、自己のすべてを他者に譲渡し、他者もまたそうするような行動なのである。そのとき、はじめて私と他者を隔て、分裂させているあらゆる虚偽は乗りこえられ、思想と行動は完全に統一され、そこに新しい内面の自由が生まれるはずである。Drieu は、ここではシュルレアリストたちの連帯性というよりも、むしろあらゆる集団の連帯性に疑いを投げかけている。Drieu にとっては、《すべてが革命という言葉の周りをめぐって転回している》にすぎないのであり、《もっとも深い内奥からの要請を忘れさせること》こそ、《もっとも私が恐れていること》なのである。したがって、Drieu は、シュルレアリストたちのめざした直接的な政治への参加、コムミュニズムへの接近を、まったく虚偽のものとして否定する。それは、思想と行動の統一に反するものであり、内面の自由と文学の自律性を失わせる以外のなにものでもない。Drieu が問うているのは、革命における政治と文学、理論と実践という問題を社会的次元において考えることではなく、人間の行動と思想の意味をより深いところで、はるかに本質的なところで考えてみることであった。したがって Drieu は《君たちのシュルレアリズムをコムミュニズムへと発展させることを可能にした知的行動の価値と正統性について君たちと議論しようとは思わない》と断言している。Drieu にとってシュルレアリズムとは、あくまでも内発的なものであり、Breton が最初の *Manifeste du surréalisme* において、《私がめざしているような、シュルレアリズムとは、現実世界の告発にあたって、弁護証人として召喚するよちのないほどにはっきりと、絶対的非順応主義を宣言するものである》と書いているような、いかなる外的な要因によっても制約されることのない、内面の自由の《啓示》なのであった。

Drieu にとって行動とは、彼がかつて戦争において体験したように、自己のすべてを投げだすことであり、それは、《殺す》か《殺されるか》というすべてが無かという問題なのであり、《われわれは暴力に参加するのだと書きながら、その二年後にもなお生きている……ような君たちを、私はけっして許さないだろう。暴力とは、最後の瞬間にいたるまで留保すべき神聖な言葉なのである》と、Drieu は、激しい口調で彼らの行動なるものの意味に疑問を投げかけている。Drieu にとって、いっさいか無かの間にあるものは、虚妄の退廃した現実にほかならない。

しかしながら、Drieu にとって、20年代のシュルレアリストとの出会いは、決定的な意味をもつものであった。戦後の絶望と退廃のなかで、内面の意識に深くおりていくことによって、自己を発見し、そこに無限の可能性を見出すという書くことの意味を、彼は、シュルレアリストたちによって発見したのだった。さらにまた、シュルレアリストたちの政治への参加によって、Drieu は、文学と政治の問題を、彼自身の生きかたにそくして問いなおすことをよぎなくされたのであった。*Les Derniers jours* 誌の趣意書のなかで Drieu は書いている。《われわれを導いているのは退廃なのであろうか。準備され、われわれを呼んでいるのは革命であらうか。革命を遂行するものは誰なのだろうか。コムニストなのか、ブルジョワなのか。われわれは理性——理性による厳しい検討だけが長期的行動を準備しうる——にその判断をゆだねることを願いながら、なおそれを保留することを怖れていない。》Drieu は、すでに人間と文化の問題を革命という展望のもとに、あらためて問いかけようとしている。それと同時に、書くことの意味をも、あらためて検討せざるをえない。1927年に発表された *Le Jeune Européen* とその翌年に刊行された *Genève ou Moscou* は、退廃と絶望のデカダンスの文学者、Drieu が、やがて行動の文学者へと転回していくうえでの転機を含んだ作品なのである。

註

- (1) Jacques Baron: *L'An I du surréalisme suivi de l'an dernier*, 1969, p. 167.
- (2) Marcel Arland: *Drieu La Rochelle*, N. R. F. décembre, 1953.
- (3) Maurice Nadeau: *Histoire du surréalisme*, 1964, pp. 81-84.
- (4) Pierre Daix: *Aragon, une vie à changer*, 1975, p. 167.
- (5) Aragon は、*Un cadavre* に *Avez-vous déjà giflé un mort?* と題する一文を書き、そのなかで、《うすのろモラスと老いぼれモスクワ》と書き両者を同一に並べて批難していたことにたいする批判。
- (6) Louis Aragon: *Communisme et révolution, La Révolution surréaliste*, 15, janvier, 1925.
- (7) Pierre Daix, *op. cit.*, p. 168.
- (8) Frédéric Grover: *Drieu La Rochelle*, 1979, pp. 306-307.
- (9) *Le Jeune Européen*, p. 45.
- (10) Pierre Andreu: *Drieu, témoin et visionnaire*, 1953, p. 46.
- (11) 西川長夫: 『「30年代精神」と文学——ドリュ・ラ・ロッシュェルを中心に』(河野健二編: 『ヨーロッパ——1930年代』, 1980)
- (12) Dominique Desanti: *Drieu La Rochelle ou le séducteur mystifié*, 1978, pp. 158-159.
- (13) Dominique Desanti: *op. cit.*, p. 170.
- (14) Dominique Desanti: *op. cit.*, p. 171.
- (15) Pierre Andreu, Frédéric Grover: *Drieu La Rochelle*, 1979, pp. 22-23.
- (16) *La Révolution d'abord et toujours!*, *La Révolution surréaliste*, octobre, 1925.
- (17) Pierre Naville: *La Révolution et les Intellectuels*, 1927, p. 105.
- (18) André Breton: *Légitime défense, La Révolution surréaliste*, décembre, 1926.
- (19) *Au grand jour*, 1927. (Maurice Nadeau: *Documents surréalistes*)